

# 風葬の街

田中光二

# 風葬の街

# 風葬の街

1981年4月30日 第一刷

定価は帯・カバーに表示してあります

著 者 田 中 光 二

発行者 徳 間 康 快

発行所 株式会社徳間書店

東京都港区新橋四の一〇

電話東京(四)六三二番(代表)

振替東京四一四四三九二番

(私丁・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取り替えいたします)

〈編集担当 芦沢孝作〉

目次

プロローグ 5

第一部 夢の追跡者

第一章 13

第二章 32

第三章 57

第四章 77

第二部 夢の殺戮者

第一章 109

第二章 129

第三章 156

第四章 177

エピローグ 193

装帧／秋山法子

# 風葬の街



## プロローグ

男は、的確なリズムで、車を操<sup>あやつ</sup>っていた。次々に現われるカーブを、一つずつ機械のような正確さでこなして行く。

沃<sup>も</sup>素入りヘッドランプの、アッパー・ビームにした光が、濃い闇を仮借ないメスのように切り裂き、男に次に行なうべきステアリングさばきを教えた。

車は、二・四リッターのEGI（電子燃料噴射）エンジン<sup>エンジン</sup>を積んだGTで、男のものである。シートを占めるのは男一人だが、リアシートにはさらに貴重な客<sup>客</sup>が乗っている。

男は疲れていたが、口笛でも吹きたい心境だった。彼の心を二つに引き裂こうとしていた悩みは、すでに消えている。意志は定まり、そして行動に移された。あとはただ、その行動を最後まで果たすことが、男に残されたすべてだった。

男は、コンソールボックスに置いた煙草をまさぐると、一本抜き出してくわえた。シガーライターを使わ

ず、着ていたスエードのジャンパーから使い古したダンヒルを取り出して、火を点けた。一瞬の炎のゆらめきに、秀麗なまでにとのつた男の顔が浮かび上がった。

年齢は三十代後半か。秀でた額に高い鼻梁の持ち主である。ただ二つの目は、異様におちくぼんでいる。懊惱をくぐり抜けたあとの、狂気じみて澄んだ光をたたえていた。

道は、深更の闇の中を、なおも高度を上げながら十九折りに続いている。道の右手には、溪流の流れるふかい谷がひろがり、左手は、そそり立つ山肌になっている。落石よけの金網が張られた山腹は、すでに紅葉のさかりをすぎしており、山枯れの季節が近いことを告げている。……しかししきりにせよ、今の男の心には、情緒が入り込む余地はなかった。

右手のV字形の谷は、さかのぼるにつれて広くなり、やがて巨大なコンクリートの壁に突き当たる。高さ百メートルの、壮大なアーチを描く壁だ。今、その放水

口は閉ざされ、わずかな水しか放流してはいない。溪流はひっそりと、うすく緑色に濁った水をたたえて流れているだけである。

やがて男の目にぼんやりと、そのダムのアーチのひろがりが見えて来た。道はダムの左手を巻いてさらに高台に出、人造湖を見下ろしながら湖畔に沿って奥へと続く。ねじれたサツマイモのようにほそながい湖水には、中ほどでくびれた部分をまたいで橋がかかっているが、道はそこで二又に分かれ、一方は湖水の源流の一つの奥にある温泉郷へとさらにさかのぼり、一方は橋をわたって、対岸の高台に設けられた展望台へと至る。

男は、その展望台を目指していた。そこで、目指す相手に会うことになっていたからだ。男はダッシュボードの時計を見た。十一時十五分前を指している。約束は十一時だ。この分なら、きっかり時間通りに行き着けるだろう。

男が目を前方に戻した時、バックミラーに白い光が

映じた。アッパー・ビームにしたヘッドライトの光だった。ぐんぐんと追い上げて来る。男は眩しさに顔を歪め、低い声で罵った。

おおかた、獺期の始まったシカ狩りにでも来たハンターでも乗せているのだらう。この奥の温泉を目指しているにちがいない。それにしても、傍若無人な飛ばしうだった。

男はスピードをゆるめると、舗装はされているが狭い二車線の道を、左の路傍に避けた。フラッシュを光らせ、追い越すよう合図を送った。

だが、たちまち追いつがって来た車は、びたりと男の車の背後に付くと、スピードを落とした。ライトをローア・ビームに切り換え、男の車のペースに合わせて、走り始めた。

……男の額に、うっすらと脂汗が滲み始めた。胸に不安が兆し、それはたちまちはげしい嵐となつて男をおおった。

——やつは、追跡者か？ おれは始めから、尾けら

れていたのか？ それなら、なぜ止めようとしらない？ それとも、おれの行く先を見届けようというのか？

……それなら距離を置いて尾いて来る筈だ。

あるいは、夜間ドライブの退屈しのぎに、競り合いでもしかけようというのか？ 崖ふちの、これほど危険な道で？ それならば、狂気の沙汰だ。

男は、しばらくためらった。しかし、不安と焦りが、なかば無意識のうちに男を行動に移させた。男はギアを二速に落とし、アクセルを踏み込んだ。自重一トンを越える重いGTは、EGIエンジンの唸りを上げて飛び出した。近づいて来たカーブを、四輪をドリフトさせ、タイヤの悲鳴を上げて回り込んだ。現われて来たわずかな直線で、男はさらに加速した。相手を、一気に引き離そうとしたのだ。

だが、次のカーブにかかる前に、バックミラーに白い光の花が咲いた。相手も、箱型の乗用車だが、かなりの高性能車らしい。出遅れをものともせず、追い上げて来た。ビームをはげしく切り換えながら、あおっ

て来た。

男は初めてはつきりと、相手の意志をさとした。こっちを、挑発しようとしている。恰好の競り合いの相手と見なして、挑んでゐるのだ。やりすごそうとしても、そうはたやすく引き下がるまい。執拗に、あおり続けるだろう。ランデブーの場所まで尾いて来られると、ことは面倒になる。一気にぶつちぎるほか、手はなかった。

男は、車の性能を極限にまで駆り立て、猛然と飛ばし始めた。相手にはどうあろうと、これは彼にとつて遊びではない。命を賭けても切り抜けなければならぬい切迫した罫となつていた。

相手もまた、獲物をいたぶる豹のように、追いつがつて来た。エンジンとエキゾーストの咆哮、タイヤの悲鳴が、森閑とした峡谷にひびきわたつた。

男にとつて第一の不幸は、相手の車の性能も、ドライバの技術も、男とほぼ互角だったことである。男は死にもぐるいにカーブをかわし続けたが、敵を引

き離すことは出来なかった。男の顔は汗にまみれ、ドライビング・グローブはじつとりと汗に濡れた。

人造湖の広大な水面を右に見るいくつめかのカーブにさしかかった時、男にとつて第二の不幸が待ちかまえていた。宵にはげしい雨が降り、山腹を伝い下りた沢水が、湖面に突き出たカーブの路面にまであふれ出ていた。きびしい夜の冷え込みで、それは凍りつつあった。

一・二トンの重量を、はげしく加速させているタイヤが、その上にまともに突っ込んだのだ。男はタイヤが横滑りし始めた瞬間、とつさにカウンター・ステアリングを当てようとしたが、遅かった。車は、油の上に乗ったかのように慣性のみちびくまままっすぐに滑って行き、ガードレールを突き破つて宙に浮いた。男の悲鳴を閉じ込めたまま、暗い水面へと落ちて行つた。

——そこから三キロほど離れた、湖水を見下ろす展望台の上で、二人の男が暗視単眼鏡の視野にすべてをとらえていた。水煙がおさまリ、車の姿が完全に没し

た時、男の一人は単眼鏡を下ろした。低く罵った。

「馬鹿が。自分からダムに飛び込みやがった。……ここまで来ておいて。何てこった」

「しかし、やつをあおったのは、何者だ？」

なおも単眼鏡で監視を続けているもう一人が呟いた。

——その車は、男の車が引きちぎったガードレールの手前に停まり、三人はどの人かげが降り立って、湖面をのぞき込んでいる。

「やつは、最初から尾けられていたのか？」

「分らん。いずれにしろ、任務は失敗した。長居は無用だ。……引き揚げよう」

トレンチコートの襟をふかふかと立てた二人の男は、展望台の駐車場の隅に駐めてあったセダンに、急ぎ足で近づいた。乗り込み、エンジンをかけると、スモールランプだけを点け、忍び足で展望台を下って行った。湖畔に沿ってダムの西側へと下る道を、走り去った。

男の車が宙に浮いた瞬間、そこから一万キロ彼方の、

ニュージーランド南島の都市クライストチャーチにあるホテルの一室で、ぐっすりと眠っていた女が悲鳴を上げた。女は自分の悲鳴に目覚め、パジャマの襟をかき合わせながら起き上がった。夢に、自分が脅やかされたことを知った。

しかし、つかのまおぼろな夢の世界をよぎったおそろしい情景が、決してただの悪夢ではないことをさすっていた。



# 第一部 夢の追跡者



## 第一章

### I

成田国際空港の出迎えロビーは、いつもの通り混んでいた。時刻は朝九時。そう到着便が輻輳する時間ではないが、空港には朝も昼もないのだ。

千代木梢は、フエンディの小型スーツケースだけを持ち、税関カウンターを後にしてロビーへ出るゲートへと向かった。シドニーで買い求めたカンガルーのファー・コートを羽織り、細身のジーンズにロングブーツをはいている。寝不足と心労で憔悴をかくせない顔を、カルダンのサングラスでおおっていた。

自分のサムソナイトのスーツケースと、梢の大型のフエンディのスーツケースとをカートルに積んだマネジャーの財部が、あわててその後に続いた。トレンチコートに身をかためた財部は小肥りの小柄な男で、いつもせかせかとした挙措が目立つ。

梢は、早足でゲートを通り抜けると、そこに佇<sup>たず</sup>んでいる出迎えの人垣を見渡した。千代木梢だとすぐに知られ、サインを求めに来るお調子者がいるかも知れない。だが今は、かまっちゃはいられなかった。

人垣を押し分けて、一人の男が近づいて来るのが目に入った。メタルフレームのグラスをかけ、ツイードのジャケットをラフに着た、瘦せぎすの学者タイプの男だった。目立たぬ風采が、その男の最大の特徴といえた。

「——千代木さんですね？」

おちついた声で呼びかけた。

「はい。あなたは、兄の……」

「そうです。兄さんの同僚で、電話をさしあげた秋月<sup>あきづき</sup>です。所長にいいつけられて、お迎えに来ました。いろいろと、混乱しておいででしょうからね」

「混乱というより、電話をいただいた時は、おどろきましたわ」

秋月と名乗った男と、ロビーの隅へ移りながら梢は

いった。

「何しろ、寝耳に水ですもの。……それで、兄の死体はまだ揚がらないんですか？」

秋月はゆつくりとかぶりを振った。

「それが、ふしぎなことだね。……もう三日経つわけですが、いくら湖底を探しても見つからないんです。千代木君が、あの車に乗っていたことはたしかなんですけどね」

——本当にたしかなのかしら？

梢はふと、日本から電話を受けた時の悪夢がよみがえるのをおぼえた。今でも、そんなことが起ったとは信じられない。兄の弓彦<sup>ゆみひこ</sup>は慎重な男だった。学者に特有の、すべて論理的にしか動かないタイプの男だったのだ。その兄がなぜ、一人でそんな無謀な運転をしたのだろうか？

——千代木弓彦君が、自動車事故で行方不明になりました。

ニュージーランドのクライストチャーチに滞在して